

# 台湾人の日本語アクセント知覚における諸要因

## —2 拍語を中心に—

潘 心瑩

キーワード：軽声、変調、音響解析、母語の干渉、中間言語

### 1. はじめに

日本語音声の習得においては、アクセントに関わる問題がしばしば指摘される。音声教育では、知覚段階においてアクセントの聞き取りが困難であるために生成の段階でも問題が生じる場合と、知覚においては問題ないものの生成段階で調音点などの問題によって不自然な発音となる場合とで指導が異なってくる。適切な指導を行うためには、まず学習者の持つ問題の原因を理解する必要がある。本稿では、台湾語<sup>1</sup>母語話者が日本語（東京語）アクセントを聞いた際に、日本語アクセントをどのように聞き取っているか、その特徴を明らかにし、それらの特徴をもたらす諸要因について考察を行う。

### 2. 日本語アクセント知覚についての研究および問題点

日本語アクセント知覚についての研究は、これまで日本語母語話者、日本語学習者を対象に、次のような調査が行われてきた。

Nishinuma(1994)はフランス語母語話者、荒井・西沼(1995)は英語母語話者、李(1995)は韓国語母語話者、そして鮎沢(1995)は韓国語・英語・フランス語・北京語・東京語話者を対象に「東京語アクセントの聞き取りテスト」<sup>2</sup>を行っている。

Nishinuma(1994)では、拍数別とアクセント別それぞれの正答率が示されており、荒井・西沼(1995)では、イントネーションが3拍語のアクセントの聞き取りに影響を与え、1型・2型アクセントにも影響を与えていることが報告されている。荒井・西沼(1995)はさらに、聞き取り調査の結果を、学習者のブレースメントテストの結果および、堀口(1973)の英語母語話者における特殊拍を含まない4拍アクセントの生成の結果と比較し、アクセントの聞き取りと学習時間、文法能力、読解能力との間に関係が見られなかったことを報告している。また、生成と知覚の傾向にずれがあり、生成においては3型の誤答が最も多いのに対して、知覚では0型の誤答率が最も多かったことを指摘している。

李(1995)は、韓国の大学で日本語を主専攻とする1・2・3年生を対象に調査を行なった。そして聞き取りテストの前に意識調査を行い、それぞれの調査結果について拍数別とアク

<sup>1</sup> 本稿でいう台湾語は、中国語の厦門方言（閩南語）のことを指す。

<sup>2</sup> テストは「語やフレーズが単独で提示されるもの」、「イントネーションを含む文の中における語やフレーズ」、「文全体が提示された文中の語やフレーズ」の三種類の聞き取りで、刺激語は3拍から6拍のもので合わせて24項目である。

セント別の正答率を示した。意識調査の結果、アクセント別では、2型と0型の正答率が高い一方で、3型4型の正答率が低いのに対し、聞き取りの結果、アクセント別では、全体的に0型の聞き取り正答率が最も高く、3型の聞き取り正答率が最も低いことが示されている。また、学年別の結果、1年生は0型の正答率が際立って高いが、ほかのアクセント型に対する弁別力は低く、特に1型の正答率が低い。これに対して、2年生と3年生は0型の正答率が多少低く、1型の正答率がよくなっているという特徴が見られたことも指摘されている。しかし、テストの前に行われた被験者の内省によるアクセントの意識調査と聞き取り調査との相関は見られなかったことが報告されている。

そして鮎沢(1995)では、「語やフレーズが単独で提示されているもの」の結果のみが報告されている。拍数別については、フランス語話者がその他の言語話者とは有意に異なり、特に5拍語の正答率がその他3言語と比べて極めて低いことが示されている。アクセント別でも、フランス語話者の解答はその他の言語話者とは有意に異なっており、1・4型の正答率が極めて低い。母語とアクセント型別正答率のクロス集計でも極めて有意な差が認められており、0型の正答率が高いのは英語・フランス語・北京語話者、2型で正答率が高いのは韓国語・英語・フランス語話者、3型で正答率が高いのはフランス語・北京語話者、4型で正答率が高いのは北京語話者であることが報告されている。また、同じ刺激語に対し、母語別に異なった解答パターンが生じる原因を探るため、テスト項目のうち5拍語を例として、それがどのような韻律パターンであるか、「音声録聞見」を用いてピッチ曲線を示し、学習者がそれに対してどう反応しているかについても考察されている。韓国語話者の解答に2型と3型が多いのは、釜山のアクセントに2型、3型のようなピッチパターンがよく使われているからであるとしている。そして英語話者に1型と2型の正答率が高い理由として、英語の単語の約7割が第1音節にアクセントを持つため、語頭にピッチピークがあるパターンに耳慣れしていることを挙げている。さらに、英語・フランス語・北京語話者が4型に対して0型とする解答が多いのは、語末のピッチ下降を自然下降として聞き流し、アクセントとしてではなく文末イントネーションとして聞き取っているためであるとし、結論として、日本語学習者の韻律に対する知覚の傾向を理解するには学習者の母語の韻律的特徴を知る必要があるということを描している。

このように、日本語アクセント知覚における多くの研究は、Nishinuma(1994)で用いられた聞き取りテストを用い、調査対象を変えて調査を行っている。その中では、聞き取りの結果について拍数別・アクセント別の正答率が示されているが、アクセント別の結果をアクセント核の位置で表したことについては疑問を感じる。同じ拍数語においてはアクセント核の位置で示しても問題は生じないが、拍数が増えるにつれ、アクセント核が1拍ずつずれることから、異なる拍数語を同一のものとして扱うことはできない。また、テスト問題はイントネーションの要因も関わっているため、アクセントそのものを測定するのに適切でないと考えられる。その上問題項目数が少ないため、信頼性にも欠けているようにも思われる。さらに、母語がアクセントの知覚に影響していることが指摘されているが、

母語がどのように日本語アクセントの聞き取りに影響しているかは明確ではない。鮎沢(1995)にも指摘があったように、日本語学習者の韻律に対する知覚の傾向を理解するには、学習者の母語の韻律的特徴を知る必要がある。したがって、本稿は、これらの日本語アクセント知覚の研究で使われた聞き取りテストの問題点を改善し、同じ母語を持つ集団(ここでは台湾語母語話者)を対象に日本語アクセントの知覚調査を行った。以下では、その結果に現れる特徴と、それらの特徴をもたらす諸要因をさまざまな観点から考察する。

### 3. 調査対象と実験方法

#### 3.1 被験者

今回の実験の調査対象は、台湾の大学で日本語を主専攻とする日本語学習者(以下、日本語専攻)36名と、日本語を主専攻としない日本語学習者(以下、非日本語専攻)30名、日本語学習歴のない大学生(以下、日本語学習歴ゼロ)21名である。3被験者群は聴力の正常な20代の成人であり、母語はすべて台湾語である。また、日本語学習者の日本語学習歴はともに3年であるが、日本語が専攻であるか否かで学習時間が異なる。

#### 3.2 モデル音声

2拍・3拍・4拍の異なるアクセント型の有意味語36語と無意味語12語、そしてダミーを7語加えたテスト問題を作成した。有意味語は、日本語能力試験3級の出題基準における語彙から選出し、特殊拍や母音の無声化、または母音が二つ以上続くものなどは出題範囲外とした。テスト問題は東京語を母語とする男性に発音してもらい、録音したものをモデル音声とした。音声テープは約30分である。提示する単語は一つにつき2回ずつ繰り返し発音される。1回目の提示と2回目の提示の間には2秒のポーズ、各問題の間には5秒のポーズを置いた。

#### 3.3 実験手続き

まず、調査の注意事項について北京語で説明し、解答用紙<sup>3</sup>を配布した。次に、モデル音声を聞かせ、4問の練習問題を行った後、聞き取りテストを2回行った。2回目のテストは、1回目のテストと同じ内容で、提示語の順序を入れかえただけである。テープレコーダーは教室の一番前に設置し、被験者が教室のどの位置に座っても適度な音量で聞くことができるよう配慮し、自信がないものには答えないようにという指示を出した。そして、被験者に、テープを聞きながら解答用紙に書かれた単語のピッチの下がり目に「」のマークを記し、下がり目のない場合は(無)にマークするよう指示した。1回目の聞き取りテスト終了後、3分間の休憩を設け、2回目の聞き取りテストを行った。その後、フェイスシートに記入してもらい、それを回収し調査を終了した。

<sup>3</sup> 解答用紙は二種類ある。日本語学習歴のある者には、問題項目の単語が仮名で書かれたものを、日本語学習歴のない者には、仮名の代わりに○で表したものをを用いた。

### 3.4 分析方法

サイン検定によって両テストの等質性、項目分析とキューダー・リチャードソン公式 21 (K-R21) によってテスト問題の妥当性と信頼性について検討した。そして、被験者別に拍数別・アクセント別の正答率を換算し、比率の差の検定を用いて、有意差( $p<.05$ )とした。さらに、誤りの特徴はカイ 2 乗検定によって分析した。

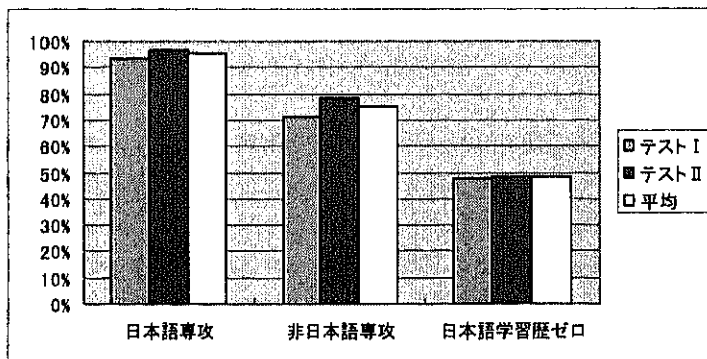
## 4. 調査の結果

調査の結果、両テストを同じものとして見なすことはできなかったが、正答率はすべての項目が 20% から 80% の間にあることや各項目の点双列相関係数がすべて 0.4 以上ということから、本調査で用いられたテスト問題は妥当であることが示された。信頼性については、K-R21 の推定値を計算したところ、0.96 という結果が得られ、テスト問題の信頼性も高いと言える。本稿では、2 拍語を中心に被験者別にアクセント別、有意味語・無意味語別、聞き取りの傾向などの特徴を分析し、その要因について考える。

### 4.1 2 拍語の正答率について

【表 1】2 拍語正答率

	日本語専攻	非日本語専攻	日本語学習歴ゼロ
テスト 1	93.75%	71.39%	48.02%
テスト 2	96.76%	78.33%	48.41%
平均	95.36%	74.86%	48.22%



【図 1】2 拍語正答率

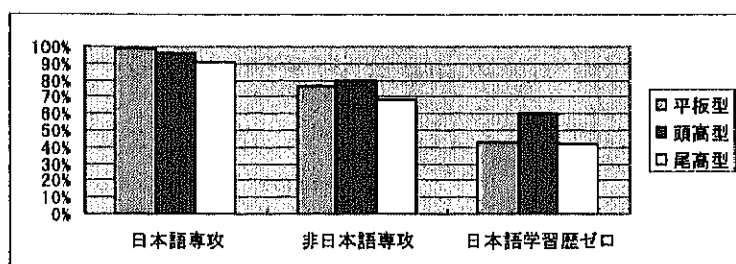
まず、テスト 1 とテスト 2 においては有意差が見られなかった。このことより、各被験者内でのテスト 1 とテスト 2 の違いはないと言える。表 1 と図 1 において、日本語専攻群の正答率が最も高く、すべて 90% を超えている。逆に日本語学習歴ゼロ群の正答率は最も

低い、ほぼ 50%の正答率をあげていることがわかった。このことから、台湾人の 2 拍語日本語アクセントに対する知覚度は、低くても 50%程度はあるということがわかる。

## 4.2 アクセント別正答率

【表 2】被験者別各アクセントの正答率

	平板型	頭高型	尾高型
日本語専攻	98.61%	95.84%	91.32%
非日本語専攻	76.25%	80.00%	68.33%
日本語学習歴ゼロ	42.86%	60.12%	41.67%



【図 2】被験者別各アクセントの正答率

日本語専攻群においては、すべてのアクセント型の正答率が 90%を超え、中でも平板型に対する正答率は最も高く、100%に近い正答率をあげている。それに続いて頭高型、尾高型と並んでいるが、両者には有意差が見られた。

非日本語専攻群においては、頭高型の正答率が最も高く、それに続いて平板型、尾高型の順に並ぶ。ここでは、正答率の最も高かった頭高型と平板型の正答率の間では有意差が見られず、最も低かった尾高型は平板型との間で有意差が見られた。

日本語学習歴ゼロ群においては、頭高型以外すべての正答率が 50%に満たない。三つのアクセント型の中では頭高型の正答率が著しく高く、それに続いて平板型、尾高型と並ぶが、平板型と尾高型の間には有意差は見られなかった。これに対して、両アクセント型と正答率の最も高い頭高型との間に有意差が見られた。

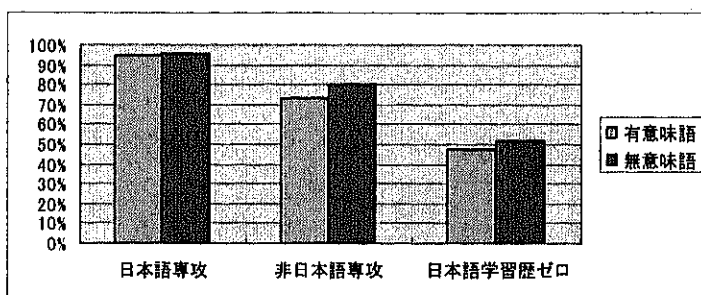
以上の特徴をまとめてみると、学習の有無にかかわらず台湾人は頭高型に対する弁別能力が比較的高いものの、尾高型に対する弁別力は相対的に低いことがわかる。また、日本語学習歴ゼロ群では、平板型と尾高型には有意差が見られなかったのに対して、非日本語専攻群には有意差が見られた。このことより平板型は尾高型より弁別度が高いと言える。さらに、日本語専攻群において平板型に対する正答率がほぼ 100%であったことから、学習の有無で平板型に対する弁別力が大きく異なっていることがわかった。したがって、学

習につれてアクセントの下降の有無が弁別できるようになると言うことができる。

### 4.3 有意味語と無意味語の正答率

【表 3】 有意味語・無意味語正答率

	日本語専攻	非日本語専攻	日本語学習歴ゼロ
有意味語	95.06%	73.15%	47.09%
無意味語	95.84%	80.00%	51.59%



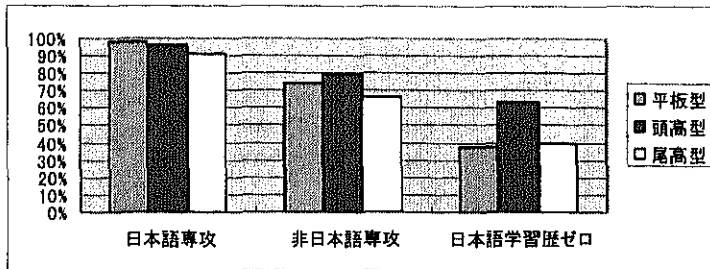
【図 3】 有意味語・無意味語正答率

表 3 と図 3 からわかるように、3 被験者群とも無意味語の正答率が有意味語より高い。有意味語と無意味語との間には有意差が見られず、無意味語の正答率が有意味語より高いことから、聞き取りの際の意味の貢献度は少ないと言える。日本語学習歴ゼロ群は、有意味語であっても無意味語であってもすべて無意味語としてしか捉えないため、両者に差は見られない。そして弁別できない分負担も大きく、正答率が低い。日本語専攻群はアクセントの弁別力が高いため、有意味語か無意味語かはあまり問題視されず、両者とも正答率が高い。

### 4.4 アクセント別有意味語正答率

【表 4】 有意味語アクセント別正答率

	平板型	頭高型	尾高型
日本語専攻	98.15%	96.30%	90.74%
非日本語専攻	74.45%	78.89%	66.12%
日本語学習歴ゼロ	38.10%	63.49%	39.68%



【図4】 有意味語アクセント別正答率

有意味語における日本語専攻群のアクセント別正答率は、平板型が最も高く、100%に近い正答率が見られた。それに続いて頭高型、尾高型の順に並び、両者には有意差が見られた。

非日本語専攻群においては、頭高型の正答率が最も高く、それに続いて平板型、尾高型の順に並ぶが、後二者の間には有意差が見られなかった。

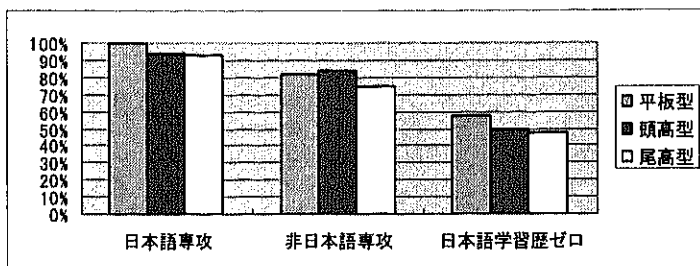
日本語学習歴ゼロ群においては、頭高型の正答率が著しく高く、それに続いて平板型、尾高型と並ぶが、この両者は40%にも達しておらず、両者には有意差も見られなかった。

以上の特徴をまとめてみると、有意味語においては、台湾人の頭高型に対する弁別能力はほかのアクセント型より比較的高いが、尾高型に対する弁別力は低い。また、日本語専攻群と非日本語専攻群における平板型と日本語学習歴ゼロ群における平板型との間に有意差が見られたことから、学習の有無で平板型に対する弁別力が大きく異なると思われる。したがって、学習につれてアクセントの下降の有無が弁別できるようになると言える。

#### 4.5 アクセント別無意味語正答率

【表5】 無意味語アクセント別正答率

	平板型	頭高型	尾高型
日本語専攻	100.00%	94.44%	93.06%
非日本語専攻	81.67%	83.34%	75.00%
日本語学習歴ゼロ	57.14%	50.00%	47.62%



【図5】無意味語アクセント別正答率

無意味語におけるアクセント別の正答率は、以下のようなものである。日本語専攻群においては、すべてのアクセント型の正答率が90%を超えている。中でも平板型に対する正答率が最も高く、100%の正答率が見られた。そして有意味語と同様に、続いて頭高型、尾高型の順に並び、後二者の間には有意差が見られなかった。

非日本語専攻群においては、有意味語と同様に、頭高型の正答率が最も高く、それに続いて平板型、尾高型の順に並び、ここでも後二者の間に有意差は見られなかった。

日本語学習歴ゼロ群においては有意味語と異なる結果が得られた。有意味語では頭高型の正答率が一番高いが、ここでは一転して平板型の正答率のほうが高いことがわかった。それに続き、頭高型、尾高型の順に並ぶが、ここでは両者の有意差は見られなかった。

以上の特徴をまとめてみると、無意味語においては、日本語専攻群と日本語学習歴ゼロ群では平板型に対する弁別能力が最も高いのに対して、非日本語専攻群のみ頭高型に対する弁別能力が高い。

#### 4.6 誤りの傾向

2 拍語における各アクセント型の誤用分析を行い、それらの誤りに一定の傾向が見られるかどうか、カイ2乗検定によって誤りの特徴を分析した。その結果、日本語専攻群には有意な誤りの傾向が見られなかったのに対して、非日本語専攻群および日本語学習歴ゼロ群には誤りの偏りに有意な傾向が見られた。両被験者群とも頭高型と尾高型を混同する傾向が見られ、刺激語が頭高型の場合、非日本語専攻群は尾高型に( $\chi^2(2)=8.89, p<.05$ )、刺激語が尾高型の場合、非日本語専攻群は頭高型に( $\chi^2(2)=12.37, p<.05$ )、日本語学習歴ゼロ群も頭高型に( $\chi^2(2)=12, p<.05$ )誤って聞く傾向が有意であった。また、刺激語が平板型の場合、非日本語専攻群は尾高型に( $\chi^2(2)=5.76, p<.05$ )、日本語学習歴ゼロ群は頭高型に( $\chi^2(2)=6.23, p<.05$ )誤って聞く傾向が有意であった。

### 5. 考察

ここでは、4.6 節までに観察された日本語アクセント知覚の特徴をもたらず諸要因につ



いて、北京語<sup>4</sup>と台湾語のアクセント特徴およびモデル音声で用いた刺激語彙の基本周波数曲線から考察する。

まず、母語が日本語アクセントの知覚にどのような影響を及ぼすかを観察するため、北京語と台湾語のアクセントの特徴をしてみる。北京語のアクセントは一般的に「四声」と呼ばれ、単音節の場合、全部で4種類ある。その高低変化は高高、中高、低低中、高低であるが、2音節以上場合、この4種類に加えて「軽声」<sup>5</sup>というものが現れる。2音節の北京語アクセントの特徴は、楊(1991)で報告されているように、常用語のうち約7割を占め、その声調の組み合わせの中では後半に四声を持つ2音節語が最も多く、軽声が後半にくる2音節語を含めると半数以上が「前平後降」のパターンである。

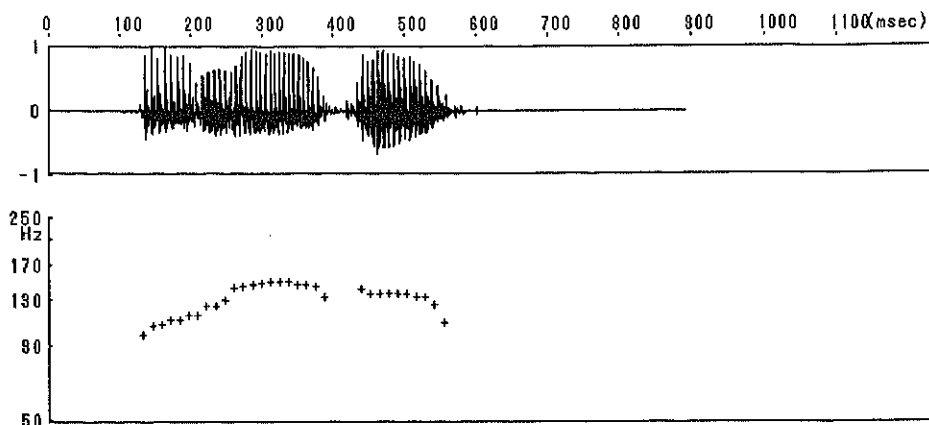
台湾語アクセントは、一般的に「八声」と呼ばれるが、単音節の場合、全部で7種類ある。その高低変化は高高、高中、低低、中低、低高、中中である。ここでも北京語と同様に、2音節以上の場合、「軽声」が現れる。そのほかにも最終音節のみ本来の声調を保ち、それ以前の音節を本来と違った声調に変化する「変調」といった規則がある。2音節の台湾語アクセントの特徴は、変調規則により語頭に常に高い音が立つことである。語末に軽声立つ場合でも、軽声の前は本来の音調を保つ規則などから、2音節語のみ語頭に高い音が立つといった特徴がある。

次に、母語のほかにもどのようなことが日本語アクセントの知覚に影響を及ぼすかを調べるため、本調査で用いたモデル音声の刺激語彙の音響解析を行った。図6は平板型、図7は頭高型、図8は尾高型で、横軸は持続時間長(ms)、縦軸は基本周波数(Hz)を対数スケールで示す形になっている<sup>6</sup>。なお、各図は上段が原波形、下段が基本周波数曲線になっている。潘(印刷中)では、基本周波数曲線が明瞭にあらわれる「ママ...が」で調音した無意味語のデータを代表的に提示したが、本稿では無意味語と有意味語との違いについても比較するため、有意味語を提示する。

<sup>4</sup> 台湾では共通語として北京語が使われているため、北京語アクセントの特徴も分析することにする。

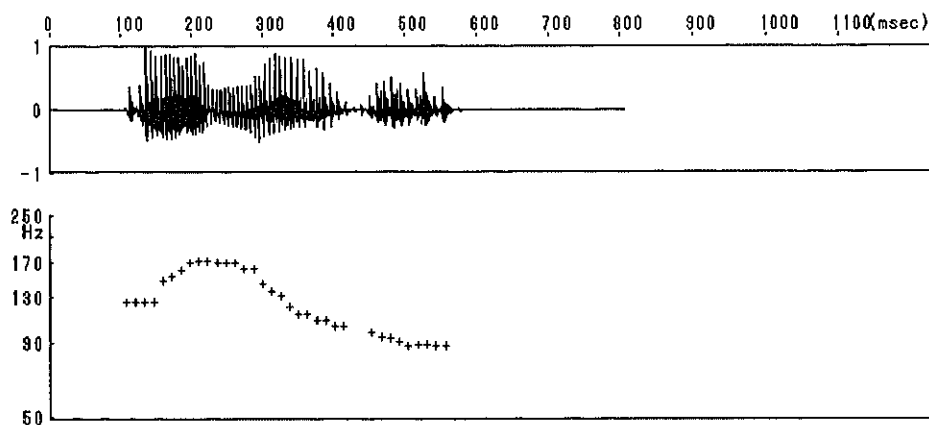
<sup>5</sup> 軽声は軽く短い音調で、四声と違って音声の高低変化よりも強弱を表す。

<sup>6</sup> 図は ANIMO 社製 SUGI Speech Analyzer を用いて作成した。



【図6】2拍語平板型（あねが）

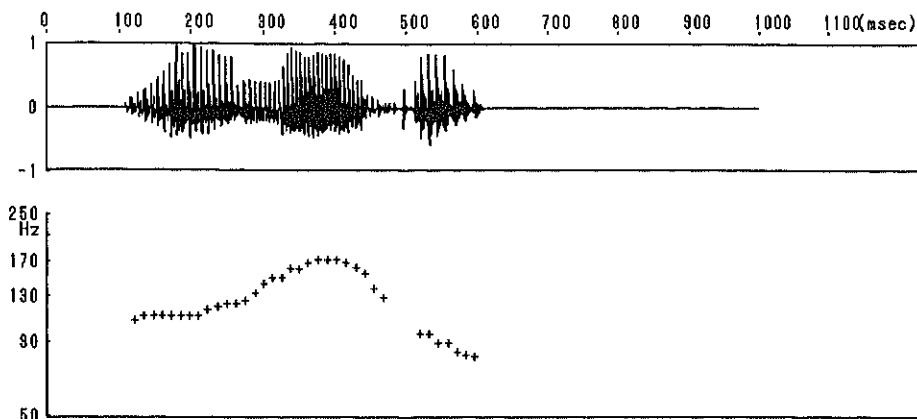
図6に示した平板型では、始点「あ」(98Hz, 0ms)<sup>7</sup>からなだらかに上昇し、2拍目の「ね」の[e]で最高点(149Hz, 213ms)を示し、その後語末(108Hz, 456ms)まで自然下降している。



【図7】2拍語頭高型（あめが）

図7に示した頭高型では、始点「あ」(125Hz, 0ms)から上昇し、2拍目の「め」の[m]で最高点(174Hz, 126ms)を示し、その後2拍目終点(97Hz, 316ms)に向け下降を生じ、「が」では終点(86Hz, 459ms)まで自然下降している。

<sup>7</sup> ポイントごとに示すカッコの中は、(その時点の基本周波数(Hz), 始点からその時点までの持続時間長(ms))という形で示す。



【図8】2拍語尾高型（やまが）

図8に示した尾高型では、始点「や」(107Hz, 0ms)から2拍目の「ま」の[m](125Hz, 175ms)までただちに上昇し、その後2拍目内部で上昇し[a]で最高点(173Hz, 291ms)を示し、語末の終点(81Hz, 495ms)に向け下降している。

3被験者群は最も低い日本語学習歴ゼロ群でも2拍語の日本語アクセントをほぼ50%近く聞き取ることができた。特に頭高型に対する弁別度が高い点に関しては、北京語の「前平後降」のパターンが北京語話者にとって最も自然であることや、台湾語の変調規則により2音節語のみ語頭に高い音が立つことといった母語の特徴が影響しているのではないかと考えられる。また、図6から図8より、頭高型はほかのアクセント型と比べ高低差が明確であることから弁別度が高いということが推測される。したがって、頭高型の識別は早期に習得されるということが予測される。

平板型においては、日本語専攻群には有意な誤りの傾向が見られなかったのに対して、非日本語専攻群および日本語学習歴ゼロ群には誤りの偏りに有意な傾向が見られた。平板型は、図6で示す基本周波数曲線からわかるように、積極的な下降を伴わない。したがって、ほかのアクセント型との最大の違いは自然下降ではない下降を伴うか否かである。ただし、日本語の学習時間につれて平板型の正答率が上昇していることから、台湾人が下降の有無を識別できるようになるか否かという問題に関しては、学習歴によって克服できる可能性が高いということが予測される。また、同じ下降の有無を識別できない被験者でも、学習歴の有無によって下降の位置を誤って聞き取る傾向が見られた。

尾高型においては、3被験者群とも正答率が最も低かった。これに関しては、上記と同様、北京語の2音節語のアクセントパターンおよび台湾語の変調規則と軽声による2音節語の特徴が影響していると考えられ、母語の干渉が見られる。また、図6から図8を見ればわかるように、尾高型は頭高型ほど高低差が明確でないため、弁別度が頭高型より低いことが推測される。

有意味語と無意味語の違いにおいては、3 群とも無意味語の正答率のほうが有意味語の正答率より高いことから、聞き取りの際、意味による貢献度は少ないことが明らかになった。

誤りの傾向については、日本語専攻群では誤りの偏りに有意差が見られず、非日本語専攻群と日本語学習歴ゼロ群のみ、頭高型との混同に有意差が見られた。この点に関しては、基本周波数の最高点はすべて2 拍目にあり、基本周波数曲線の特徴から、下降のタイミングだけでなく上昇の仕方を含めたゲシュタルト全体の違いという相違点と、最高点が2 拍目に来るといふ共通点が浮かび上がってくる。図6から図8より、非日本語専攻群が頭高型と尾高型を双方向に混同し誤っているという事実は、被験者が下降動態のタイミングに関して必ずしも明確な抽象化ができていないということを示していると考えられる。一方、日本語学習歴ゼロ群がすべての型を頭高型ととらえていることについても同様のことが考えられ、下降の有無をとらえているというより、最高点が2 拍目に来る場合に頭高型と回答しているように思われる。また、北京語と台湾語のアクセント特徴が影響を与えていることも考えられる。モデル音声の音響解析において、今回は有意味語の刺激語彙の基本周波数曲線から日本語アクセント知覚における諸要因を探ってみたが、下降のタイミングに関係なく、基本周波数の最高点という音響的要因、つまり物理的に高い部分を被験者が積極的に聞き取ることによって、誤りが生じていると言える<sup>8</sup>。

## 6. まとめと今後の課題

以上の実験結果をまとめると、2 拍語の場合、まず3 被験者群ともにほぼ50%の日本語アクセントが弁別できた。中でも頭高型に対する弁別度が高いが、尾高型に対する弁別度は低い。これに関しては、北京語の声調パターンおよび台湾語の変調規則など母語におけるアクセントの特徴が影響して弁別度が高くなると考えられる。また、モデル音声の刺激語の音響図でわかるように、頭高型はほかのアクセント型と比べ高低差が明確であるということも、頭高型の弁別度が高いという特徴に影響していると推測される。したがって、頭高型の聞き取りの識別は早期に習得されていると予測される。

次に、日本語専攻群には有意な誤りの傾向が見られなかったのに対して、非日本語専攻群および日本語学習歴ゼロ群には誤りの偏りに有意な傾向が見られた平板型については、学習歴によって克服できる可能性が高いということが予測された。下降の有無を識別できない被験者は、学習歴の有無によって下降の位置を誤って聞き取る傾向も見られ、非日本語専攻群においては平板型を尾高型に、日本語学習歴ゼロ群は平板型を頭高型に聞き取る傾向が見られた。日本語学習歴ゼロ群が平板型を頭高型に聞き取る傾向は、北京語の声調パターンや台湾語の変調といった母語の干渉と考えられるが、平板型を尾高型に聞き取る非日本語専攻群は一種の中間言語を形成していると考えられる。また、両群が頭高型と尾

---

<sup>8</sup> この点については、潘（印刷中）と一致する結果が見られた。

高型とを混同するという誤りに有意差が見られたことについては、下降のタイミングに関係なく、基本周波数の最高点を聞き取ることができたためと推測される。

さらに有意味語と無意味語での違いも見てきたが、誤りの音響的要因は潘（印刷中）と一致する結果が得られた。しかし、日本語専攻群と日本語学習歴ゼロ群には見られず、非日本語専攻群のみに見られた有意味語と無意味語の正答率の差については、非日本語専攻群がアクセントの識別に有意味語か無意味語かということを一種のストラテジーとして使用しているという可能性がある。

本稿では、台湾人の2拍語アクセント知覚における諸要因について考察した。その結果、被験者群によって現れる特徴は、共通のものもあれば、そうでないものもあることが判明した。また、その要因としては、母語以外にもさまざまなものがあることがわかった。本稿の考察は、習得における問題点を考える上でも有益なものであると考えられる。しかし、同じ特徴にしてもさまざまな要因が絡み合い、一つの要因で説明しきれないものもある。特に発達過程における中間言語の形成や音響分析で見られた特徴は、他言語の母語話者にも同じような傾向が見られるかどうか、その普遍性について調べる必要がある。また、今後は、北京語と台湾語の声調パターンの音響解析を行い、日本語のアクセントパターンと比較し、その違いを追及しながら、新たな要因についても探っていきたい。

#### 【参考文献】

- 荒井雅子・西沼行博(1996)「アメリカ人日本語学習者による東京語アクセントの知覚」  
【平成7年度日本音声学全国大会予稿集】日本音声学  
舘沢孝子(1996)「日本語学習者による東京語アクセントの聞き取りー韓国語・英語・フランス語・北京語話者の場合ー」【平成7年度日本語教育学会秋季大会予稿集】日本語教育学会  
池田央(1978)『テストで能力がわかるか』日本経済新聞社  
今石元久(1997)『日本語音声の実験的研究』和泉書院  
李明姫(1995)「韓国語学習者の東京語アクセント知覚ーソウル地方の場合(1)ー」【平成7年度日本語教育学会秋季大会予稿集】日本語教育学会  
田中敏(1996)『実践 心理データ解析』新曜社  
田中敏・山際勇一郎(1989)『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版  
藤堂明保(1980)『中国語音韻論 その歴史的研究』光生館  
潘心登(印刷中)「台湾人における日本語アクセントの知覚ー音響音声学観点からー」【言語学論叢】22, 筑波大学一般・応用言語学研究室  
樋口靖(1978)「台湾語の音節構造について」【筑波大学言語文化論集】3  
樋口靖(1978)「台湾語の声調体系」【筑波大学言語文化論集】4  
樋口靖(1991)「台湾語の軽声について」【筑波大学言語文化論集】33  
P・ラディフォギャッド(佐久間章訳)(1976)『音響音声学入門』大修館書店  
堀口純子(1973)「英語国民による日本語の四音節名詞のアクセントの予測と実態」【日本語教

育] 19

- 楊立明(1991)「漢語常用詞声調分布情况的分析」【紀要】43, 早稲田大学語学教育研究所
- 楊立明(1993)「中国語話者の日本語述部の韻律に見られる母語の干渉」【日本語音声と日本語教育】文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1 班平成4年度研究成果報告書
- レスリー・M. ビービ編 (島岡丘監修/卯城祐司・佐久間康之訳) (1998)【第二言語習得の研究-5つの視点から】大修館書店
- ロバート・ラドー (門司勝・本田漢・吉田一衛・松畑熙一訳) (1971)【言語テスト】大修館書店
- Best, C.T. & W. Strange. (1992) 'Effects of phonological and phonetic factors cross-language perception of approximants.' *Journal of Phonetics* 20
- Nishinuma, Y. (1994) 'How do the French perceive tonal accent in Japanese? Experimental Evidence.' ICSP94
- William, L. (1984) *Foreign and Second Language learning*. Cambridge: Cambridge University Press

【参考資料】

- 金田一春彦監修・秋永一枝編(1996)【明解日本語アクセント辞典】(第二版)三省堂
- 国立国語研究所(1982)【日本語教育基本語彙七種比較対照表】大蔵省印刷局
- 国際交流基金/日本国際教育協会(1993)【日本語能力試験出題基準 (外部公開用)】
- 日本放送協会編(1998)【NHK日本語発音アクセント辞典】(新版)日本放送出版協会